

2人に
1人が

がんになる時代がやってきた!?

「誰もが最期は自宅を迎えたい。
私たちは、その願いをかなえる
お手伝いをしています」

菅原由美さん ● 全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス代表
有限会社ナースケア役員

看護師時代、病院で死を待つだけという患者の状況に違和感を覚えた菅原由美さん。その思いは、末期の大腸がんだった義母を自宅で看護してから、より強くなったと言います。「潜在ナース」たちが力を合わせれば、多くの人が自宅ですごすことができるのではないかと。その思いが高じて、訪問ボランティアナースの会「キャンナス」を設立。在宅介護・看護をサポートする活動を続けています。



1955年神奈川県生まれ。東海大学医療技術短大看護学科卒。東海大学病院ICUに1年間勤務。その後、企業や保健・非常勤勤務の傍ら3人の子どもを育てる。96年「キャンナス」、98年「ナースケア」を設立。日経WOMAN主催「ウーマン・オブ・ザ・イヤ-2005」のリーダー部門7番目にランクイン受賞。09年には「ナースオブザイヤー」、「インディペンデント賞」を受賞。

すがわら・ゆみ

帰宅したことで義母は、
充実した最期を迎える
ことができました。



私は短大を卒業後、看護師として働き、その後、結婚して3人の子どもたちを育てながら、夫の祖父母と義父母の介護を経験しました。夫の祖母は100歳で天寿をまっとうしたのですが、義母が大腸がんになり、手術をしたものががんが広がりすぎて切除ができませんでした。医学的にこれ以上やれることはないとい医師は判断したのでしょう。私が看護師の資格をもっていったこともあり、「菅原さんだったら点滴を換えることもできるでしょう」と、義母の帰宅をすすめてくれました。

いまから20年前は末期がんの患者を自宅に連れて帰るのは、抵抗のある時代でした。でも、治療のしようがなくあとを死を待つだけという人が、なぜ病院ですごさなくてはいけないのか。このことは学生時代から不思議でなりません。たまたま私が看護師だったことから義母は帰宅を許されたわけですが、近くに看護師がいれば、多くの人が自宅で最期を迎えることができるかもしれない。私のように結婚を機に家庭に入った看護師たちにできることがあるのではないかと。私自身、がんになつたら自宅で最期を迎えたいと思っていましたし、そのときに面倒を見てくれる人がはたしているだろうか、不安にかられたこともありました。

「いけいけ! ボランティアナース」アニカ刊 1,680円(税込) 地震被災地でのボランティア体験、キャンナス立ち上げからの苦勞は、並大抵ではなかったことがよくわかります。「なぜここまでやるのかと聞かれたら、根っからのおせっかいだし、物好きとしか言いようがない」と菅原さんは笑いますが……。やろうという強い信念があれば、何ごとも実現は可能なんですね。



キャンナスの本部は神奈川県藤沢市にあります。ここを拠点に菅原さんはケアマネージャー、講演の仕事など忙しく飛び回ります。

バックを換えること。義母は1か月後に大量の下血で病院に運ばれそのまま亡くなりましたが、病院のベッドで死を待つよりもずっと充実した最期を過ごすことができたと思います。

高齢者や障害者、患者さんのお宅に看護師が伺い、在宅でのケアをサポートする訪問ボランティアアナースの会「キャンナス」を設立したのは、1996年の春のことです。きっかけは、阪神・淡路大震災の被災地域でのボランティア活動でした。ニュースでアジア医師連絡協議会（AMDA）が医師・看護師を募集しているのを知り、いてもたってもいられなくなり応募。現地の被害は深刻でボランティア活動は大変でしたが、素晴らしい医師・看護師たちとの出会いがあり、ボランティアアナース

としての活動を数年続けました。そして、義母を看護していたところに描いた、潜在ナースの団体をつくる夢を実現したいと強く思ったのです。

やるとなったら猪突猛進。説明会を開き、私の思いに賛同してくれた看護師免許をもつ約30人のスタッフたちとともにスタート。夫が経営する中古車販売会社の片隅ではじめた事業も、いまでは全国に30か所以上の支部ができるまでになりました。

**最期の最期ぐらいたく家族に迷惑をかけた
逝きましよう。**

一介の看護師だった私をはじめたキャンナスは、決して平坦な道を歩んできたわけではありません。理不尽な要求をしてくる行政との闘い、仲間の裏切りなど精神的にも肉体的にも参ったこともあります。でも、自宅ですぐすことと利用者の方々元気になっていく姿を見ると、つくづくこの仕事を続けてよかったなと思います。

私はよくケアマネージャーやナースたちに「家には妖精がいるんだよ」と話します。子どもがまだ小学生という、若い女性のがん患者さんの話です。余命1か月といわれ最期を自宅という家族の願いで、私たちがお世話することになったのです

が、退院したときは自宅の階段も上がれないほど衰弱してしましました。子どもさんが夏休みを迎えるまでの3か月間、なんとかがんばってほしいと私たちが必死でしたが、その後、1か月どころか1年半たったいまも彼女は生きています。しかもご飯をばくばく食べ、庭の草むしりもしているというではありませんか。すでに脳に転移もしていって発作が起きるかわからないと医師には言われていましたが、一度も発作は起きていません。

に返ることで、症状がよくなる患者さんは少なくありません。私たちが旅行から自宅に戻るとほっとしますよね。どんなに素敵なホテルに泊まっても「やっぱり家がいちばんいいね」と言ったりします。慣れ親しんだ家には、そういうことを言わせてしまふ、ちからがあるんだろうなって思います。

「家族に迷惑をかけたくない」。そんなことを言う患者さんは少なくありません。とくに女性に多く、がんの末期であると告知を受けた方など子どもや夫に迷惑をかけるならば、病院にいたほうが良いと帰宅を諦めてしま

キャンナスとは？

在宅介護や看護をしている人たちが、少しでも心身をリフレッシュしながら介護を続けていくために、看護師資格をもつ「潜在ナース」のちからをいかすことができないか、という菅原さんの考えのもと1996年に設立。キャンナスという名には、デキル（Can）範囲で行うナース（Nurse）という意味が込められています。介護



東海大学医療技術短期大学時代の菅原さん（左側）。

保険制度下では対応しきれない滞在型訪問介護のスタイルを貫いて、地域に根付いたボランティア団体として全国各地で展開しています。

キャンナス設立の2年後には有限会社である「ナースケアー」を設立し、介護保険制度を活用した在宅ケアサービスを提供。介護保険に加入後、要支援・要介護認定を受けた段階からサービスを利用することができます。

キャンナスについてのお問い合わせ

キャンナス本部（湘南） 神奈川県藤沢市鵠沼橋1-2-4
電話：0466-26-3980 <http://nurse.jp>

うんです。そんな方に私は言います。「いままで育ててきたんでしょ。ご主人のためにがんばってきたんでしょ。最期ぐらいたく迷惑かけてもいいじゃない」って。

この世に生を受けたなら、必ず死を迎えます。死を受けとめるには、命のリレーの現場を子どもたちに見せること。大家族だった昔は死がもつと身近にありました。祖父母が安らかに死んでいく姿を孫が見れば、死というものは決して怖くはないと思うはず。いまは医学も進歩し、とくにがんの場合は痛みをとることがあたり前になりました。在宅医療を理解し対応してくれる医師も増えていきます。介護保険の導入で、在宅介護を取り巻く世界も変わりました。私自身、住み慣れた自宅で最期を迎えたいし、家族にも「あなたたちに迷惑をかけることになっても、家で死ぬからね」と常々言っています。がんと告知されたら私自身、死への不安から気持ち爆発するかもしれません。その姿は家族にしか見せられないと思います。そしてその家族を支えてくれる第三者が必要なんです。それがキャンナス。その気持ちを忘れずにこれからはがんばりたいです。